

恋姫無双とか勘弁して
下さい

ミラベル

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

転生したら後漢末期、しかも知っている人たちは女。ついでに自分も女に。

そして真名という独特な風習……恋姫と無双と解った主人公があたふたする話。

目次

プロローグ	1
どうしてこうなった	20
神は死んだ	44

プロローグ

「私」という自己が確立していく過程で、私には違和感があった。

それは今の自分の生活の不便さから始まる。

まず、現在の正確な時間が解らない事に違和感を覚えた。

一刻、二刻と時間を数えるが、私はどうにもその時間の数え方に馴染めない。

漢数字にも違和感を覚えた。あの漢字で表す数字にはどうにも慣れない。

ついで今の生活にも違和感を覚えた。

それは井戸で水を汲み瓶に水を貯める生活の行為であったり、川で魚を釣るための竿のような道具であったり。

土壁で作られた家であったりと、自分自身でも理由が見つからない違和感だった。

何せ生まれた時からこの環境にいるのだ。

生まれた時から自分は国からも、ましてや村からも出たことは一度もない。

比較対象もないのに、それがおかしいと思うこと自体が妙な話である。

……あと、変な話だが下のやり方にも違和感があった。

小の方なんだが、座ってやることにも違和感がある。

いや、女が立つてすることがまずおかしいのであるが、どうにも意識がはつきりとした時から、この違和感は拭えなかったのだ。

そんな様々な違和感を抱えて生きてきた私であったが、村に立ち寄った商人からの話でようやくこの原因が解った。

私はズバリ、異世界に転生していた。

つまり私の意識の根底には、異世界人としての知識があつたのだ。

光武帝だとか、項羽と劉邦だとか。

現在は漢が国を治めているとか。

そんな話を聞かされて、モヤモヤに包まれていたそれがはつきりと晴れた時、私は自分が転生した存在であると気が付かされ、確信した。

死んだ原因は覚えていない。

ついで私の前世は男だった。どうりで最近色気づいてきた女友達の話題に乗りきれないわけだ。

商人の話を聞くに、どうやら後漢末期らしい。

肉屋が宮中で十常侍とゴタゴタしているという話を耳にしたから間違いはない。

と、ここまで聞いて自分は過去の世界に転生したのだと思った。

が、どうやら違うらしい。

曰く、肉屋は女であるという。

思わず笑ってしまったが、どうにも商人の話を聞くにマジだそうだ。

ちなみに西涼の馬騰はどうかと聞くと、これも女。

曹家や袁家は聞けばこれも当主は女だという。

「なんでや」

思わずそう言ってしまった私は悪く無いだろう。うん、悪くはないはずだ。

そして、もう一つ。私はここで思い出し、気がついてしまったのだ。

この世界には真名という、親しい者にしか教えず、親しい者としか呼び合えない風習がある。

これを知らずといえど真名を許されない者が、相手の真名を言ってしまうえば打首になつたつて文句は言えない。

そんな設定がある某18禁のゲームの存在を、私は知っていた。というか私はそれを楽しんでいたことを覚えていた。

「……恋姫無双じゃないですかやだあああああああああッ!」

ここで私はこの世界が異世界であると知り、同時にこれから始まるだろう乱世を思つて腹痛と頭痛によつてその場にうずくまつた。

急に叫んだ挙句、お腹を抱えてうずくまる私。傍目から見ても気が狂つたようにしか

見えない。

そんな私を見て慌てる商人をよそに、私は必死に考えた。

この世界、所詮エロゲと違ってなめたらいけない。

登場する人物達のほとんどは、物理法則やら人体法則を無視して、某無双ゲーの如く暴れまわる。

ついで後漢末期なのに麻婆豆腐は作る、ドリルはある、『気』などというところでもパワーはあるわけで、三国志という名の異世界に近い。

確か別ルートではヴリトラとかいうマジモンの神話級化け物まで登場したはずだ。

そんなのは別会社の某聖杯戦争でやってくれ。ここは三国志だ。

恐らく、この世界は私を知るように乱世になつていくのだろう。

この世界の強制力と修正力はとてもやばかったはずだ。

主人公とかいう大抵はその肩書だけで大半の危機を乗り越えられるような者でさえ、世界に抗ったせいで最終的には文字通り世界から消されてしまった。

まず十中八九、騒乱が大陸中で巻き起こるに違いあるまい。

そしてそんな世界で生きている以上、私も世紀末に近い状態の日常を過ごさなければならぬのだ。

私の頭のなかに、劉備や曹操や孫策と一緒に三国統一を目指すだとか、自分で国を立

ち上げるといふ選択肢はない。そんなものはない。

「親が望む一番の就職先が公務員」な世界が当たり前で、安定志向の一般ピーポーだった私が、そんな道を進む度胸があるとお思いか。

いやだ、そんな面倒事は断じて嫌だ。

例えるならば建国は「起業」、英雄達と進む道は「大手企業の内定後に自分で企画立案交渉行動」だ。

就職先はどこがいいですかと聞かれたら、第一に公務員という目に見える安定を取る私だ。

そんな冒険心は無いし、自分にそんな勇氣があるとも思つてはいない。

それ以前に、あいつら全員怖いんだよッ!?

画面越しに見るから可愛く見えるだけであつて、実際は人をバンバン殺すし発想も物騒な連中だ。具体的にはイライラしていたら刀剣を振り回す奴が多数だ。現代で言う「異常精神患者」共がたくさんいるのだ。

まあ乱世だからしょうがない。現代という比較的統一されていて安定している社会ではないのだから。

むしろ、彼女たちのような在り方でなければ生きられないし狂つてしまうのかもしれない。

というわけで、遠くで愛でるならまだしも、近くで生きていこうとは思えない。胃が死ぬ。すぐに死ぬ、今死ぬ。

私は舞台したから演劇を見るならまだしも、自分で舞台上がって必死に練習して演じるような人間にはなりたくない。

確かに観客から浴びる声援は気持ちいいだろうが、そのために死ぬような思いをしたくないし死にたくないのだ。

そうなると、私がやることは限られてくる。

私にできることは、これからやってくる騒乱を乗り切るために武術を磨くこと。

そして勉強や商売や社会などの幅広い知識を、生き残るために身につけることだ。

いくら「明日からがんばる」ことが多い私であっても、死にたくはない。

いくら面倒くさくても、いくら辛くても、いくら苦しくても、生きるためにはやるしかないのだ。

私の姓は『結（ゆい）』、名は『巍（ぎ）』。

ただの農民で、元男の女。

死なないために、今日も私は山に上り体を鍛え、商人や旅人から情報を得る。



ある村に、『非凡』と噂される少女がいた。

齢い五つで理路整然とした言葉述べ、商人が見せた書物を理解する。

更にはそれに対する疑問を問いただし、独自の見解を述べて商人を驚かせた。

さらに都の様子や他の群の様子を聞きとると、知らないはずの事実まで推測して当て見せたという。

「一を教えて百を知る」と少女の事を商人は褒め称えた。

だが村の者達は幼さを見せず、年不相応大人びた雰囲気と、能面のように顔を強ばらせ、表情を変えぬ少女を不気味に思いその存在を隠した。

齢い六つになれば少女は山に登り、狩りを行うようになった。

幼子には到底引けぬような大人用の狩人の弓を用いて、兎や狐といった大人でさえも慣れねば手こずるような獣たちを次々に打ち取る。

さらに近隣の村の長老達から、野草の知識や薬草の加工と抽出の知識を学び始めた。

普通の村人達は体の怪我を癒やす薬草の知識を求めたが、彼女が最も求めたものは毒の知識であった。

時には山に登り、庵や洞窟に住む怪しげな呪い師から教えを受けるなど、その執念は計りがたく。

周囲の大人が驚くほどの集中力でこれらの薬学を修めていった。そうして彼女が齢い七つの時。

人喰い虎が山道に現れたと村々で話題となった。

旅の武芸者が腕試しと何人もその参道へ向かうも、一人も帰ってこなかった。

少女はその話を聞くやいなや、弓と短剣を持って村を飛び出した。

少女の親は流行病で兩名ともなくなっており、親戚がその身を預かっていた。

しかし年に見合わぬ聡明さと、張り詰めたように妙な気を漂わせる少女を、親戚は不気味に思っていたので彼女を止めなかった。

同じように、村の者達も彼女を不気味に思っていたので止めなかった。

数日の時が経った。

少女は自分の背丈を超える程の虎の頭部を背負い、山道から帰ってきた。

既に数日音沙汰も無く、死んだと思っていたので親戚と村人たちは驚いた。

そして少女の姿を見て、言葉を失った。

体中に泥が塗られており、その上からは大量の乾いた血が塗り重ねられていた。

匂いも山猿のように酷く、周囲の大人たちは皆一様に鼻を押さえる。

一番の特徴は、彼女が出かける前には無かった顔の傷であった。

顔の真ん中を通り過ぎるかのように通った三本の裂傷。虎の爪が掠ったと何事もな

かったかのように言つてのけた少女に、周囲の大人たちは震え上がる。

端正で美しい顔に刻まれた、激しい戦いの傷跡。

「毒を使わなければ死んでいたかもしれない」と坦々と述べた少女を、周囲の大人たちは人喰い虎以上に恐ろしく思った。

本来であれば彼女の勇名が村々へ伝わつてもおかしくはない。

しかし村人達はこの悍ましい少女の存在が周囲へ伝わることを恥として嫌い、虎の討伐の手柄は村の若い衆が行つたとした。

少女はこれに不満一つ漏らさず、「そうですか」と呟くと水浴びのために川へ向かう。欲を出さず、不平一つ言わない。

障害残るであろう怪我を負つてまで得た大手柄。

知られれば士官も夢ではないそれを奪うという、酷い仕打ちを与えたのにも関わらず彼女は何も言わない。望まない。

人としてあるべき欲を見せぬ少女を村人たちは更に気味悪がった。

最も、少女はそんな事を気にせず山に上り、熊や虎の噂が上がるやこれを狩り続けた。

旅の武人から武の教えを請い、気の扱い方を学び、商人から知識を得る。

そうして少女が十になった時。

ある商人が、こんな辺境にこんな傑物がいるとはとたいそう驚いて、是非養子にと乞うたことがあった。

少女は商人よりも遙かに早く、そして空で計算をやつてのけた。

さらに近隣の村に案内役として商隊に連れ添った際に、襲つてきた野党十数名をたつた一人で返り討ちにしたのだ。

遙か遠くの野党を弓で穿ち、取り囲む彼らをまるで舞を舞うように切り捨てていく。少女に切られた傷はわずかであっても、その毒によつて瞬く間に動けなくなる。

そうして倒れていく輩の中で最後に立っている彼女は、「森の獣よりも遅い」と息切れ一つなく言つてのけた。

おまけに負傷した商隊を薬学と医学によつて治療するという、辺境の農民の出とは思えない聡明な少女に商人はとことん惚れ込んだのだ。

だがこの商人の願いを村人たちは聞き入れなかった。

既にこの頃には乱れた世の中が更に乱れたことで、賊がそこら中に往来していた。

また悪天候からくる食料不足と、疫病や病の流行の兆しが噂されていたからだ。

この村を含めた周辺の村々も度々賊に襲われる事があつたが、この少女により幾度と無く守られていた。

また少女が山から取ってくる獣の皮や肉は村の貴重な収入源であつたし、病氣や怪我

に対する知識を持つ少女は不気味なれど手放すわけにはいかなかったのだ。

だが、商人はこのままでは彼女の才能が埋もれてしまうと危惧した。

商人は自ら旅を通じて得た経験から、世が乱れる前兆があることを知っていた。

そしてきつと彼女のような才ある存在が求められると解っていたのだ。

そこで商人は自ら少女の説得を試みた。

「このままでは君はここで飼いかたにされてしまおう。ここは辺鄙で武術を鍛えることも、知識を得ることも適してはいない。私の後を継いで商人になれとは言わな
いから、私と一緒にこないか。ちようど良い私塾を私は知っている。そこに君を通わせよう」

彼は根っからの善人であった。

そして商隊を危機から救った少女に、大きな恩受けたと感じていた。

そんな彼が示した条件は、まさに破格と言つてもいいだろう。

しかし少女は顔色一つ変える事無く、首を振った。

「何故だ、どうして君ほど聡明な子がわかつてくれないんだ。みれば彼らも君を良くは思っていない。下手をすれば、君のその素晴らしい才能が埋もれるどころか潰されてしまおう」

少女はここで初めて、困った表情を見せた。

「貴方は私を心の底から想い、心配して私を誘っている。その気持はとても有りがたく嬉しい」

「ならば何故受け入れてくれない？」

「二将功成りて 万骨枯る。私は共に枯れ果てる者達に寄り添い、生きていきたい」
「ッ!?!」

商人は言葉を失った。

一人の将軍が功をたてて諸侯になるその影には、骨となつて朽ち果てる万の民がいる。

英雄と持て囃されて歴史に名を残す者がいる一方で、名も残らず散つていく者達がいる。

「彼らは決して華やかではなく、虚しく、無情。だが私もまたそうありたく思う」
「なんと……」

この年頃の子供といえ、英雄の話に花を咲かせ、いずれは自身もと夢を見る。

しかし彼女は違う。その影で無くなる無名の無量の命に思いを馳せている。

例え自身の才が埋もれても、潰されてもこの村々の生きる命を守りたいと願っている。

その慈悲たるや、如何なるものか。この矮小な身では想像もできない。

ただひとつ解ることは、彼女が大器を持つ英雄の素質があるということだけだ。故に、惜しい。

彼女の信念は固い。氷のように冷たく美しい様相とは裏腹に、その内には苛烈な意志が燃えているのであろう。

恐らく、自分のような存在ではこの少女を動かすことはできない。

「確かに、君がいなくればここ周辺の百数十人は死ぬかもしれない。しかし君が世に出れば、数万の人を救うこともできるのではないか」

「私は、私を知る世界で安寧の時を過ごしたい。私の知る世界を守りたい。あるかも解らぬ可能性の世界に存在する者達のために、どうしてこの生命を賭けられようか」

この少女はどこまでも冷静だ。
どこまでも現実を見つめている。恐らく彼女は先見の明があり先が見えているのだろう。

しかしそれでも尚、彼女は自身が受けた恩をとったのだ。

彼女の信念を愚かと笑う事は容易い。

しかし愚かと笑う事は容易くとも、彼女の考えを変えるだけの言葉と言葉の力を自分は持たない。

ああ、哀しきかな。哀しきかな。

そう言つて商人は彼女を引き込めぬ己の器の小ささに悲しみ、そして彼女が世に出ぬことを憂いた。

商人は後にこの少女の名を、もし養子にできたのであれば入れたであろう私塾の師にのみ語つた。

その師の名前は『水鏡』。そして隠れて商人の話に聞き入つていた小さな少女の二人の心にも、彼女の名は残ることとなる。



よくわからないけれど、商人のおっさんにやたらと自分と一緒に来ないかと誘われた。

おっさんが言うには、自分には武も知も備わつており、将来性抜群だという。過剰評価も良いところである。いや、本当に。

恐らく、賊に対して自身が戦つた時の様子が、彼には相当美化された形で残っているのかもしれない。

あれだ、吊り橋効果に近い心理的影響があつたのだろう。

賊といつても、所詮は元は農民。なんの戦闘訓練もされていない。

こつちが弓を持っていて馬の上で体を屈めもしないし、構えだって隙だらけ。むしろあんなんでお前ら死んでいいのかと、こつちが逆に心配してしまったほどだ。あれが武を嗜んでいる連中なら絶対にうまくいかない。

流浪の武人達を捕まえて手ほどきを受けている中で解ったことだが、自分には圧倒的に力が足りない。

剣を受けたら弾かれるかそのまま叩き潰されるし、押されたら地面を軽々と転がっていく。

気で強化してもこれなのだから、自分で言うのも何だが才能がない。その気も楽進のようにかめはめ波もどきが出来るほど操作は上手くなく、精々が体を強化するぐらい。そしてしても負けてしまう。

世の中は理不尽である。

体格は魏のちみっこ二人より少し大きぐらいなのに……。

何で神様は才能を綺麗に分配してくれへんのやツ!?

というわけで毒と速さで押し通すスタイルが確立した。

もうこの時点で士官の線は無い。だって毒ってだけで、この世界では過剰に毛嫌いされるのだ。

劉備然り、曹操然り、孫策然り、三大勢力以外にも使っていることがバレたらアウト

だろう。

なんでや、最高だろ毒。某狩りゲーでも毒は意外と使えるんだぞ。

何の力もない凡人の毒で死んでる英雄の数は少なくない。

つまり私のような凡人代表が身を守るのに、格上殺しの毒は丁度良いのだ。

だが嫌われるし、卑怯だと言われる。価値観の違いだろう。

いや、実際「毒は卑怯だ」と言われるほど優しい世界であることは嬉しいのだが、なんか釈然としない。

最終的に、おっさんから私塾に入ろうとか言う誘いがあった。

条件的には破格だが、その内容は飼育されて太らされる豚とそう変わりがない。

つまり私塾で箔をつけたら、働きなさいとどっかに推薦状持たされるに違いない。

そうなったら晴れて乱世の仲間入りだ。嫌なことこの上ない。

それと曹松さん、言い訳に使わせて頂いてすみませんでした。

ぶっちゃけそれっぽい有名な言葉を言えば、この時代の学がある大体の人は、勝手に考えて勝手に解釈してもらえらるから楽である。

早い話が禅問答に似ていて、多く語らなくてもそれっぽく「ずばり」みたいに言えば勝手に納得してもらえらる。

素晴らしい、他人と話そうとすると顔が引き攣ってしまうほどコミュ症な自分には都

合が良い。

アルバイトの面接でさえ、緊張で顔が能面のようになってしまい、サービス系は全て落とされていたという苦い記憶がある自分には実に良い話である。

まさか生まれ変わってもコミュ症が治っていないとは。いや、中身は同じだからしかたがないのか。

今生では顔に傷までできてしまっているのだから、さらに人相が悪化してしまった。せつかく顔の出来は良いというのに、最悪である。

気を使えることと、毒が使えることに慢心した結果がこれだ。

泥を体に塗って匂いを消して待ち伏せしたまでは良かったものの、最後の最後に焦ってしまった代償だ。

何故にあの時の自分は、大虎相手に短剣で大立ち回りを演じようと思ったのか。

毒で弱つていても虎は虎、焦つても接近戦は絶対にやってはいけない。

どうにも自分には英雄補正がないようだ。毒で鈍っていないければ、顔が吹き飛んでいただろう。

この経験から私はさらに自分の決意を新たにしたので。

絶対に、士官は、しません。虎よりも恐ろしい連中とどうして戦わにやらんのだ。

お金とか名誉とか、そんなものより安定が求められる現代出身をなめてはいけない。

金が稼げるからって定時で帰れないのは嫌なのだ。

というわけで、おっさんの誘いを断った。面倒くさい可能性は一欠片だって残さない。

その後も度々お声はかかるものの、その度に故事や未来の寓話や本から引用した言葉でごまかし、全て袖に振って村の中で過ごした。

その間も武術を磨き続ける。才能はなくても、無いなりに鍛えておいた方がいい。振りかかる災難、賊は増えるばかりだ。そういう連中を相手するために、鍛えることは絶対に必要。

最も、自分から賊を狩ったり、猛獣に挑んだりはもうしない。虎で懲りましたわ。自ら変なところに飛び込んだらあかん。死ぬ。

戦乱が終わるまで村で過ごすつもりだ。

劉備や曹操、孫策らが建国し、どのルートに入るか解らないがエンディングになる。そしたら武官以上に文官が求められる時代になるだろう。

戦後に文官は何人いたって足りないはず。そうなれば適当な採用条件がいいところ
で仕官すればいい。

どんなことを考えながら数年が経ったあるとき。村の長老に呼ばれた。

「ここら一帯の村々は、太平道に与する事に決めた。お前も力を貸してくれるな？」

おい。

今何言いやがったこのクソジジイ。

どうしてこうなった

黄巾の乱。

それは中国最初の宗教反乱。

宦官の専制政治と政争により国は腐敗。

各地では重税が課せられ、多くの民は苦しみに喘いでいた。

更には旱魃・疫病・凶作といった天災が国を襲った。また異民族の侵略も重なり、漢は疲弊の上に疲弊を重ねていた。

そして影響を最も受けたのは力無き民であった。

生活の基盤が壊されて尚、重税は続いていく。

飢えて弱り果て、精神的に追い詰められる彼らの精神的支柱となったのは宗教であった。

その名を太平道。

張角が作り上げた宗教教団。

元は呪術的な治療を施す民間宗教団体に過ぎなかったが、この荒れた時代の中で急激に拡大していった。

太平道は生活が立ち行かなくなった民達の受け皿となったからだ。

最初は数百人の団体に過ぎなかったが、瞬く間に肥大化。ついには六十万を超えるに至るまで成長。

そうしてついには国家転覆を企み、綿密な計画を練り上げ、ついには宦官にまで絡めとることに成功。

しかしあと少しのところでのこの計画は露見し、失敗。

もはやこれまでと張角は号令を発し、各地で反乱を勃発させる。その頭に目印として黄色の布を巻いて。

これが黄巾の乱の始まりである。

と、いうのが本物の黄巾の乱の話。

こつからが恋姫版の黄巾の乱の話。

恋姫世界の黄巾の乱は、ただのアイドルおっかけから始まった大乱である。

張三兄弟ならぬ、張三姉妹という旅芸人がアイドルもどきの活動をしていた際に、『太平要術』という巻物をファンから貰ったことから話は始まる。

なんとその『太平要術』は張三姉妹が望んでいた人々の心を掴む方法が書かれていたのだ。

彼女達はその巻物を用いて得た歌や踊りを披露。

それは摩訶不思議な人を引き込む力を持っており、瞬く間に人々の心を掴んでいった。

そして多くの欲望が彼女達の純粋な「有名になりたい」という願いを中心に入り乱れ、黄巾党という名のファンクラブが膨張していった結果。

黄巾の乱と呼ばれる反乱がこの世界で起こったのだ。

人が多く集まれば、集団としての力は制御できなくなる。

明確な規則もなく思うがままに、この乱れた世で不満不平に溢れて飢えた民を集めれば、それは反乱が起こってもおかしくはない。

つまり、今の張三姉妹は都合の良い反乱の旗印にされてしまったのだ。

「(勝手にやってくれ……)」

で、その動き出してしまった黄巾の乱にちやっかり私は参加してしまっていた。

頭にもしつかりと、張三姉妹のグッズである黄巾を巻いている。

今すぐにもツバを吐きかけて地面に投げ捨て、何度も踏みにじってやりたかった

が、そんなことしたら周りからフルボッコにされるのでしない。

人外共ならともかく、凡夫かつ心がガラスで構成されている私が、数の暴力に勝てる

わけがない。

考えて不満を心のなかで述べるだけで、実際には行動しない。そんな一番質が悪いタ

イプがこの私だ。

そもそもどうしてこうなったのか。

答えは簡単だ。

うちの村を含めた周囲の村々が、黄巾党というビッグウェーブに乗りやがったのだ。

確かに、いくら私が獣を狩ろうと重税はまったく変わらないし、天災で来年の食料は

危うい状況だ。

だからといって黄巾党という名のタイタニックに乗ることないだろ。アホか。

いや、そもそも教育を受けていない連中に、この乱がどれほど無謀で愚かか解るわけ

がないのだ。

ただ周囲の熱狂に同調して、何の根拠もなくこの瞬間の安心のために選択したのだろう。

早い話がワールドカップや、ハロウィンで周りの迷惑関係なく騒ぐバカどもと何も変わりはない。

その理由が退屈しのぎから生活の困窮に変わったただけだ。本人に悪気がないから両方共に質が悪い。

逃げたかったが、県令ですら黄巾族に取り込まれてしまった次第である。

もう自分の意志ではどうにもならないところまで来てしまっているのだ。

途中逃げようとも思ったが、顔を知られているから手配されかねない。

村人全員ぶち殺そうかとも考えた。

人を殺す事に対するためらいは最初に野盗を殺した時から無くなった。

某死の線が見える彼女も言っていたが、最初の一回目が大事なのだろう。

と感情で行動しようとするも、理性がそれを押しとどめた。

よくよく考えれば、ここらへんでそんなことできるのは周辺で自分しかいない。

良くも悪くも人喰い虎の討伐以降、賊の襲撃を防ぐなどして周辺の村々には顔と名を知られてしまっている。

田舎の情報網を舐めてはいけない。

おねしょしたら翌日には、三つ先の村にまで話が広がっているのが田舎クオリティだ。田舎又クモリテイなんてありやしない、全部筒抜けだ。

特にこの時代はラジオもテレビもネットもないから、話題に飢えまくっている。私のようなちよつと目立つ美人はそれだけで格好の噂の的だ。

流石に周辺の村々まで皆殺しにすることは私では無理だ。

なら入ったふりをして、しばらくしたら逃げようとも考えた。

しかし黄巾党に入っすぐトラブルが起こった。

私は美人だ。

ナルシストと勘違いされそうだが、客観的にみてもこれは間違いないはずだ。

長い黒髪に透き通った肌。ツンとした鼻先。パツチリとした目と出るとこは出たスタイル。

顔が精神的苦痛と胃痛で死んでいる事と、痛々しい裂傷が三本あることを除けば、抜群の美人として自信がある。

ぶつちやけ、こんな顔の女性と一夜共にできたら前世の自分は三十万ぐらい払っても良かった。それぐらいに美人なのだ。

そんな女が野郎共の中心に放りこまれたのだから、トラブルが起きないわけがなかつ

た。

黄巾党は張三姉妹の追っかけ集団が正体。

そうはいえども、いろいろな思惑を持った人間が集まっているのだ。

困窮が原因であつたら可愛いものだが、中には女を犯し財産を奪うという外道も多く参入している。

そして私は今生では女だった。

しかも美人。めっちゃ美人。

女という理由で連日いちやもんをつけられ、時には押し倒されそうになるという世紀末な日々。

「ケエエエエエエンー」と叫んでも誰も助けに来てくれるはずもなく、泣く泣く触れたくもない野郎の玉を潰しまくった。

一体何人の玉を潰したのかも覚えていない。

足で踏み潰し、手で握りつぶし、頭で押しつぶし、いちやもんや襲われる度にそうやって対処してきた。

学がないDQN相手に話し合いで解決することが不可能なのは、今も昔も変わりがないのだ。

あいつら痛い思いしないと絶対にわからないのだ。そして黄巾は人殺しも上等な平

成と比べられないほどの超絶DQNが多すぎたのだ。

しかも基礎教育すら受けてないから、現代よりも質が悪い。

何が悲しくて男の棒なんぞ唾えなきやいかんのだと、全員不能にしてやった。

肉体的には女だが、精神的には男なんだぞ。

初潮が来た時にはシヨックで三日は寝込んだぐらいに、心だってお豆腐メンタルなんだ。

時には数人がかりでこられたが、流石に気を使えない素人数人程度に負けるほど耄碌してはいない。

全員毒で動かなくなったところを、一人一人丁寧に潰していった。

復讐で来やがった連中は、さらに強い毒で痛い目を見てもらった。

どうなったかは知らないが、強い毒を使ったのだから、もうあんな気は起こさないぐらい懲りただろう。

そうして撃退を重ねるうちに、やがて襲撃も無くなっていき、村で生活した頃と同じように怖れるような目で見られるようになり、何故か黄巾党でまとめ役みたいな立場になつていた。

……どうしてこうなった。

そんな扱いされたら、途中で「はい、私黄巾党やめますッ！」とか言つて抜け出すこ

ともできないではないか。

捕虜となった黄巾党の連中に「こんなやつがいました」ってバラされかねないからだ。ただでさえ女の身で戦闘に参加出来ることは珍しく、黄巾党内では異色の存在として目立っていたというのに。

せめて名前や顔を隠そうと思っても、村の連中は私の本名を知っている。

そして何故か、ここ最近顔が書かれた紙が黄巾党の女性を中心に回っているのだ。

黄巾党は飢えた民の逃げ道としての側面を持っている。

その中には老人もいれば子供もいる。家族を連れて入るやつもいるから、女だっているのだ。

そして女というだけで、ここでは危険に晒されてしまう。

が、そこで何故か私の顔が書かれた絵が利用された。

何でも、襲われそうになったらこの紙を見せれば相手が逃げ出すのだという。

いや、実際に私は私以外にも、暴行されそうになっていた女達を度々救ったことがあった。

別に放っておけばいいのだが、そのような光景に出くわすと何故か生理的に受け付けなかつたのだ。

例えるなら、目の前で恋人同士がイチャつきを始めたところを想像して欲しい。

鬱陶しいだろ？何かムカつくだろ？無性に殴りたくなるし、他所でやれって思うだろ？

どうせ悪いのはこいつらだからと、思う存分に婦女暴行の輩は見かける度に潰しまくった。

途中から、女性に感謝されるのが嬉しくなって、自分からそういう連中を探して潰していた記憶がある。

私の頭の中では感謝されて夜を共にするところまで妄想がしたが、よく考えたら私は女だった。竿がない。泣いた。

また、絵が似てなかったら良かったのだが、何故かよく似ていた。

何でや、原作だって張三姉妹の絵は化け物みたいにアレンジされてたじゃん。

そう思っつてよく考えてみると、後半はあいつらあまり表に顔を出していなかった。

騒乱が激しくなるに連れて、まるでお姫様のように、後陣にて大切に守護されていたのだ。

一方、私はもろ顔出しOKで黄巾党内で生活している。それも人が多く集まる前線を転居する始末。

原因は火を見るより明らかであった。

もう一度言いたい。

……どうしてこうなった。



黄巾党の旗が翻る陣営を歩く女がいた。

身長は七尺五寸（約172cm）ほど。格好は黄巾党の服装をまとっており、それ自体は集団に馴染んでいるために特徴はない。

しかし、その美貌たるや中々のもの。

風に靡いて流れる髪は濡鴉色。

一本一本が宝石のように艶があつて光物のようであり、昼間であつても輝いていた。

陶磁器のように白い肌は、雪のように透き通っており触れれば壊れるのではないかと思ふほど。

服を押し上げる豊満な胸。

そして腰からお尻にかけての体の線は、男性からは熱のこもった視線、女性からは羨

望の眼差しを誘う。

黄巾党とはいえ、末端は賊の集まりと相違ない。

本陣で張三姉妹の歌という名の洗脳を受け続けた者達ならともかく、ここに集う者達に張三姉妹への忠誠を誓うものはまずいない。

食い詰めて止むに止まらず黄巾党になったか、ただひたすらに欲望を貪るために黄巾党になったか。

そのようなならず者に近い者達がここに集まって陣を形成していた。

そんな中を女が歩けばどうなるか、想像に容易い。

その欲望に曝され、暴力を受けて性欲の受け口にされることは必然。

しかし、ここにいる誰もが彼女に見とれることはあれど、襲つて食らうなど考えようはずがなかった。

「……」

女の顔もまた体や髪と同じように美しかった。

細い眉に西洋人形のような高い鼻。薄紅色の柔らかそうな唇。顔の線はすつと整っており、頬はまるで餅のようにぶつくとしている。

髪と同色の目は瞳が黒く輝き、まるで黒真珠のよう。

だが、その顔には三つの激しい裂傷が平行に刻まれていた。

そして表情はまるで氷のように凍てつき、感情を見せることは全くない。

彼女と同じ村から来たという者達は、あれが人喰い虎を退治した際に刻まれた傷であると語った。

しかも驚くことに、彼女はその時わずか六歳であったという。

多くの者達がその話をつくり話だと笑おうとしたが、笑うことができなかつた。

村人たちは、皆一様に彼女の話をするときは、顔に恐怖の色を刻んでいたからだ。

それでも何人かの男たちが彼女の美貌に釣られて彼女を襲つた。

止める、死にたいのかと必死に止める者達を「馬鹿だ」とあざ笑つて行動してしまつたのだ。

その結果は凄惨なものであつた。

彼女を襲つた者は皆一様に、男としての機能を失つた。

結韋は自身を害する者に対して、容赦がない事を村人達はずっと前から知つていたのだ。

かつて隣の村の男が、彼女の顔の傷をからかつた際に鼻を潰された。

今度は復讐でしよう仲間を引き連れ、数人がかりで押さえつけようとするが、一蹴され全員が彼女の毒によって蝕まれることとなり、高熱に一週間魘され続けた。

その事件に「お前の実力であれば、毒を喰らわせること無く勝てただろう。どうして

毒まで用いたのか」と尋ねた村人がいた。

事実村人の言葉は正しかった。彼女であれば毒を使わなくとも、彼らを抑えることは容易かった。

「死ななかつたからいいだろう」

彼女は答えた。村人は震えた。

死ななかつたから良いと。

あの高熱では下手をすれば死ぬこともあつた。若者は貴重な労働力であり、数人も殺せば自己防衛という理由では済まされない。

そうなれば起こるのは村々の争いだ。

結巍の智慧が優れていることは周知の事実。

つまり彼女は意図的にそれを解つていて尚、若者達に毒を用いたのだ。

もし争いが起こつたらどうなつたか、そう考えるだけで村人は震えが止まらなかつた。

そんな事を知らない男性としての誇りが奪われてしまった黄巾党の男達。

彼らは今度は復讐を考えた。

村人たちはそれを知つて尚、もう二度と彼らを止めようとは思わなかつた。

彼らは結末がどうなるかももう解つていた。そしてそれはそれとおりになつた

復讐にかられて彼女を襲った者達の末路は、実に哀れなものであった。

言葉がの呂律が回らなくなってしまった男がいた。その男はもう二度と、普通に話すことができなかった。

頭をやられて気狂いになってしまった男がいた。その男はもう二度と、正気を取り戻さなかった。

足が、腕が上手く動かせなくなった男がいた。その男はもう二度と、手足を自由に動かせなくなった。

体に変色したものがいた。

部位が腫れ上がり、晴れが引かないものがいた。

歯が全て抜け落ちたものがいた。

肌が破れ、血が体中から流れ出るものがいた。

髪の毛が抜け落ちて、気が狂わんばかりの激痛に毎夜襲われるものがいた。

結核の毒にやられたのだ。

いったい死んだほうがマシだったと思った男が何人いたことか。ああ、あの時に村人の話を笑わずに聞いておけばよかったと思つた男が何人いたことか。

結核の毒は、医者ですらも恐れる。

彼女が幼少の時から多くの忌み嫌われる呪術師から得た知識は、彼女の中で華を開き

独自の調合方法を編み出すに至った。

最早その毒から生まれる症状は悪夢そのもの。

同時に現れる複数の症状は、医者といえども対処しきれるものではない。

彼女の毒は教授した呪術師にさえ、これは手に負えないと恐れられた代物だ。

怯えた黄巾党の者達が、どうしてそこまでしたのかと尋ねると、彼女はまたしても

言った。彼らは尋ねた事を後悔した。

「死ななかつたからいいじゃないか。これで少しは懲りただろう」

初めてその者達は、結巍が微かに笑えむ姿を見た。

蠱惑的で美しく、傷も相まって悍ましい笑みであった。

懲りた？何を言っているのだ。

体とは違って心刻まれる恐怖はそう簡単に癒えるものではない。まして彼らは体に

も二度と癒えぬ傷を刻まれたのだ。

確かに彼女の毒では誰も死ななかつた。

しかし彼女の作った毒ではなく、自身が与えた悪意という名の毒は多くの男を死に追

いやった。

その事実をこの女が知らないはずがあるまい。

そして彼女は黄巾党内、身内であつても恐れられるようになった。

彼女は決して女性を犯そうとする外道の輩を許さなかった。黄巾党の和を乱す者を許さなかった。

「DQNは害にしかならん」

彼女はそう言つて味方であっても、有能さを示したものであつても容赦なく、不逞の輩は全て彼女により男としての機能を奪われた。

武の心得があり、自らの武功を誇つて彼女を下そうとしたものもいたが、例外なくその結果は哀れなもの。

結巍は教団の規律を乱す者は決して許さない。

例え豪のものであつても、彼女には逆らつてはいけない。そう言われるようになった。

いつしか、黄巾党の女達は彼女の姿絵を持つようになつた。

男はその絵を恐れ、女はその絵により守られた。

中にはそれを知つて尚、気にせぬ輩もいたが、暴行を受けた女が結巍に報告すればたちまち刑は行われる。

殺して口封じをしようにも、結巍を恐れた者達は自らも巻き込まれるのではないかと、進んで密告していった。

やがて男でさえも彼女の絵を持つものが現れた。

彼女は黄巾党の規律の象徴であり、揺るがぬ力の象徴。

いつ死ぬかも解らぬ戦場において、彼女の絵は自らの信念を誓う対象、精神の支えとして受け入れられたのだ。

男も女も、結巍の絵を持ち、その絵に願い感謝する、

それは真に黄巾党に志を持って入った者達にとって、張三姉妹につぐ信仰の偶像だった。

彼女が歩けば、誰もが道を開ける。

彼女が歩けば誰もが彼女を畏れ敬う。

あるものは彼女の強さに、あるものは彼女の非情さに、あるものは彼女の美貌に、彼女の規律ある在り方に惹かれる。

それには打算もあるかもしれない。

しかしその根底にあるものもまた、彼女に付いて行けば生き残れるという安心だった。

彼女がこの黄巾党で一つ抜きん出た存在と認められることに、そう時間はかからなかった。

■ ■ ■
なんか最近、男まで私の絵を持っているものをちらほら見かける。

何故だ、そんなに人気なのか。

それとも夜のおかずに使われているのか？ふざけんな玉潰すぞ。

いや、確かに玉は潰しまくったが、同意の上だったら何も問題は無いんだよ？

俺だって男だったから性的欲求がサル並みになるのは分かるし、潔癖症な女程理解がないというわけではないんだから。

そうだ、そういえば私に向けられる視線の種類も少し変わってきた。

これまでは怯えるような視線を一心に浴びていたのだが、何故か羨望の視線が増えてきたのだ。

いや、確かに性的な欲望がこもった目で見られると虫唾が走る。玉を潰してやりたくなる。

しかし、だからといってそんな憧れに近い視線を向けられても戸惑うのだ。

近頃は何故か私に軍備やら、補給物資の話が舞い込んでくるし、どう動くべきかなんて方針まで聞かれるようになった。

確かにこの軍には飯代程度の金銭の計算はできても、組織を運営する金銭の管理ができるものはいない。

ついでに農民ばかりで、戦という戦い方を知っている者も皆無に等しい。

あんまりにもそんな話が舞い込んでくるので、ある時にどうして私みたいな一般兵士にそんな事聞くのかと尋ねた。

村の連中がばらしたみたいだ。

あれ？全部あいつらが悪いんじゃない？と思って剣を取ったが後の祭りだ。

ここで殺しに行っても仲間殺しの罪で、今度は私が黄巾党に殺されてしまう。

官軍にも追いかけれられ、黄巾党からも狙われたんじゃない。

仕方がないので、適当に「天地人という役割を作り、三位一体となつて一人の兵士にかかつていけ」と某漫画そのまんま伝えた。

どうせお前ら難しいこと言っても解らんし、訓練だつてろくにしないんだからと、旧日本軍ばりの根性論を付け加えて語ったら何か感動していた。

ダメだ。こんな馬鹿どもしか味方にいないと思うと、悲しくて泣けてくる。

その場で思わず涙を零してしまつたら、何故か全員もらい泣きしていた。

泣くぐらいなら今すぐ私をここから開放してください、マジで。

他にも商人との交渉だったり、村々を取りまとめ黄巾党として編成するなど雑用は

全部任せられた。

悲しいかな。適当にやればいいのに、日本人としての勤勉さを残してしまっていたのが仇となり、結局それらも全部こなしってしまった。

「いやです」ってのはつきり言えるぐらいしつかりしてしているんなら、今頃ここにいないっての。

「いやです」っていうのは簡単だが、「じゃあどうするの」って答えに返せない程度に無能で凡夫なんだよ私は。

というかだ。そこでばつぱと革新的で素晴らしい意見が出せるぐらいなら、最初から実力主義の魏や呉に自信を持って行っている。

それにこのような軍の命運を左右する仕事に手を抜いたら、私が死ぬ確率が一気にね上がってしまう。

せめて本陣まで追い詰められて、黄巾党が滅ぼされるまではこの肉壁共に私を守ってもらわなければ困る。

確か恋姫では、最後に陣営勢揃いで黄巾党を追い詰めて滅ぼすはずだ。

結魏が狙われるのは「黄巾党」という肩書がついているからだ。

その肩書さえ失ってしまえば、あとはユルユルの恋姫世界だ。なんとかなるはず。

特に蜀は情に訴えれば勝てるはずだ、何か生い立ちとか悲壮感百割マシで語ればいけ

る。

史実でも黄巾党が滅ぼされた後に分かれた賊もどき共が、いろいろなところで士官に成功している。

あんなむさ苦しい悪役顔でさえ問題ないのだから、顔に傷はあつても美しい私も許されるに違いない。

滅亡する時に砦から抜けだして逃げてやる。他の連中なんぞ知ったことじゃない。

ごめんね張三姉妹。

全部漢の政治が悪いんだ、いや、マジで。

そんな未来を想像してほんわか仕事を今日も行う。

どうせこういう事務仕事は恋姫エンドを迎えたら、どつかに所属してやる予定だったものだ。

その予行練習だと思えばいい。諦めたらそこで終わりだ、前向きに明るく私は生きていくんだ。

せつかく美人に生まれたのだから、お化粧して野郎どもをたくさん騙して金銭を巻き上げてやる。

……あ？おいおい、お前これって軍の指揮官が承認しなくちゃいけない竹簡だろうが。

何で平兵士の私のところにこんなものをよこすんだよ。とつとと担当者に持つていけ。

「え、あの」

なんだよ、言いたいことがあるのならはつきり言えつての。

「その、この軍の責任者は結魏様に他なりません」

……はい？

「結魏様の考案なされた天地人は各地で同志達の力となつております。さらに結魏様が提案なされた黄巾党としての軍事方針もまた、中央で取り入れられてその功績が認められました」

おい、何勝手に素人が書いた軍略を基礎方針にしちやつてるの？

あんなの二刻ぐらいでささつと書いたやつじゃん、何か意見ないかって聞かれたから適当に仕上げたやつじゃん。

何で誰も止めないわけッ!? あんなのちよつとした知恵者が見れば穴だらけの……穴、だらけの。

うん、そんな頭のいい人なら史実の黄巾の乱ならまだしも、どう考えても先行きがない恋姫のこんな反乱に参加するわけないわ。

いや、まで。それよりも私が責任者つてどういうことだッ!?

「功績を上げ、規律を重んじ、戦術に詳しく武を誇る。さらには軍を運営する手腕を備えた結巍様が、その功績によって指揮官になれることは不思議ではありません。むしろ私どもにとっては、遅すぎたと思うほどです」

何だその笑顔は、私に死ねど？死ねていいのか？

私の頬が引きつり、思わず乾いた笑いが溢れる。

目の前の兵士はそんな私を見てさらに誇らしげに笑みを浮かべた。

そんな事しているうちに外からモブ兵が天幕へ飛び込んできやがった。

おい、何勝手に入ってきてんだ。ノックは社会人の常識だぞ。いや、それよりもまず私は身の安全を図るためにすぐにここから脱走をだな。

「結巍様、大変ですツ！都に潜んだ同志から、官軍がこちらへ向けて出軍したと報告がツ！」

「なっ?!結巍様、すぐに皆を集め出陣の用意をツ！」

「そんな、まだ弓の矢も槍も全然足りないというのにツ!」

「え、援軍を要請しなければ。お、おい、すぐに伝令を通じて連携を……結巍様ツ！」

「「結巍様ツ！」」

あーあー、聞こえない。聞こえないったら聞こえないってばツ!?

神は死んだ

広大な中国大陸の空にも夜の帳が下り、夜空には丸い月が艶容に輝いていた。冷たい吹きすさぶ風が、数百という陣中に打ち立てられた『漢』の旗を揺らす。

月が見下ろす大地の上には、幾多もの幕舎が設営されていた。

遠征先の官軍が敷いた野営地である。

黄巾党は張三姉妹の活動によって各地で広まり勢力を拡大。

不平不満に溢れ、国に怨嗟の声を上げる者達を取り込み肥大化した黄巾党は、ついには役人や県令を殺害し巨大な反乱を各地で巻き起こしていた。

いくら軍と宦官は常に政争を繰り返した間柄とはいえ、国の危機となれば手を取り合わねばならなかった。

様々な思惑が交差する中でそれぞれが対黄巾党へ動き出し、ついには官軍が出陣するに至った。

しかし、それはあまりにも遅い動き出しであり、黄巾党をただの賊と侮りすぎていた。既に黄巾党は村々を取り込み増えに増え、その数は一万、十万、三十万。ついには六十万に。

さらにまだまだ拡大の動きを見せるなど、乱の収束の兆しがまるで見えない有り様であった。

ついには刺史が殺されてしまった。

自体を重く見た中央から、ようやく精銳の官軍が派遣され、黄巾党相手に勝利を積み重ねていくも、あいも変わらず収束の兆しが見えない。

とてもではないが、中央が持つ官軍だけでは、各地で乱発する反乱に追いついていけなかった。

各州の主たる者達が動き始める中で、この官軍が新たな目標と定めたのは女が頭役となつてゐる、珍しい黄巾の軍であつた。

農民上がりの賊如きに、訓練された軍人が負けることはまずない。数の脅威はあるものの、それでも連戦連勝を重ね、高い士気を保ち続けてきた。

しかし、その官軍の高い士気にも陰りが見え始めていたのだった。

「おい、寝るな。首を切られるぞ」

眠気まなこで船を漕ぎ始めた兵士の一人を、連れ添うように巡回するもう一人の兵が咎める。

咎めを受けた兵士は、慌てて目をぱつと見開くと、すぐに己の非を謝罪した。

「す、すまない。ろくに眠れていなくてな」

「それは俺も同じだよ。ここに居る兵はみんなそんなもんだ」
ちらりと柵の外側に立っている見張りの兵士を見やる。

両足で槍を持って立って入るものの、どこか力ない。

顔にも疲労が浮き出ており、何度も目を擦りながら夜の番を務めている。

兵士がその様子を見て顔を歪めた。

彼自身の顔にも、隈が浮かんでいた。

「黄巾党の奴ら、連日のように夜に押しかけてきやがる。なにもしないで帰ってくれる時もあるが、ちよくちよく弓を射掛けたり飛び込む素振りを見せるから、こつちはたまつたもんじゃないっての」

「まったくだ。あいつらの叫び声で、何度起こされたことか。ここ最近満足に寝られ
た記憶が無いぞ」

黄巾党の戦い方は、その膨大な数を頼みにした戦法とも呼べない戦い方。

ただひたすらに相手を攻め続けるというものだ。しかしこれが厄介なのである。

兵の数が多いうのはただそれだけで脅威だ。

どれだけ熟練の兵士が揃った軍であっても、戦い続ければ疲労がかさむ。

そうして注意が散漫になってしまえば、農民くずれの訓練もされていない兵は言わず
もがな、子供にだって討たれよう。

だが、黄巾党にも大きな弱点がある。

統率が効かず訓練もされていない、軍とも呼べない集団が黄巾党だ。

そんな集団はやがて綻びが生じ、ヒビが入ってそれは亀裂となり、つには崩壊していく。

歴戦の官軍の将兵たちは、彼らの特性を理解した。

正面から当たるとは愚策であり、ただひたすらにその僅かなヒビが生まれるまで待てばいい、と。

少しでも穴があれば、そこから瞬く間に黄巾党は崩壊するのだ。

訓練されておらず、統率が効かぬ集団は攻めるのは強くとも、劣勢に立って守り引くことには滅法弱い。

「攻めるよりも守ることが上手い武将こそ、真の戦上手である」と有名な歴史の将は語っていた。

黄巾党はまさにこの統率が効かぬ軍であり、それを見ぬいたことで彼らは勝利を重ねてきた。

数で圧倒的な黄巾党の攻めを防ぎ耐えることは至難極まりない。

腐り果てていく国とは思えぬ、官軍の極めて高い練度がこの黄巾の乱では発揮されていた。

だからこそ、ここに来てこの官軍は手をこまねいていた。

「これまでも戦つてきたが、こんな事初めてだ。上も相当頭を抱えているらしい」「
「だろうなあ……」

勝利を積み重ねていく官軍と諸侯。徐々に敗北する黄巾党。

その流れを断ち切るかのように今も昔も変わらせずに、厳然として強さを見せ続けているのがここ一帯の黄巾党であった。

奇つ怪極まりないと評され、恐れられたこの黄巾党を打ち倒すべく、精鋭として連戦連勝を重ねた彼らが見せ参じた。

しかし、どうにも戦果は著しくない。

負けたわけではない。むしろ勝っている。

戦う素振りを見せれば黄巾党は逃げる。一度も正面から当たろうとはせず、攻めれば逃げるばかりであった。

だが退こうと思えば、とたんに攻めかかってきてはすぐに逃げていく。

何度も殲滅するべく総決戦に持ち込もうとしたが、その度にうまい具合にかわされてしまうのだ。

おかげで僅かばかりの戦果と勝利を積み重ねていくだけで、時は過ぎるばかりであった。

これまでとは全く異なる動きを見せる黄巾党。

官軍の将達は噂は真であつたと、頭を痛める。

そして二つの問題があつた。

一つは連中の輜重隊の襲撃である。

ここの黄巾党の戦いぶりは何とも不甲斐なく、手応えがない。

しかし、送られてくる兵糧や物資を載せた補給の隊に容赦なく襲撃を掛けてくる。

何度それを防ごうと思つても、土地勘に優れた現地民を取り込む黄巾党相手に、完全に防ぎきることは不可能に近い。

ここの黄巾党は親の敵が輜重隊かと思わんばかりだ。

官軍が総攻撃を仕掛けようとしているのに、背後の陣地の物資と、そこに訪れようとしてた輜重隊を襲う始末。

ここの黄巾党は攻めかかられた守るべき砦を放棄してまで、こちらの物資を焼きに来ている。

いったい空の砦を取つたところで何の意味があるというのか。

動くに動けず、戦況は膠着するばかりであつた。

もう一つの問題である「夜襲のようなもの」も厄介極まりない。

「ようなもの」とは、それが夜襲とは到底いえないものだからだ。

ほぼ毎晩のように深夜、大声で襲撃をかける素振りを見せれば、瞬く間に攻撃を仕掛けることなく退いていく。

ただ騒ぐだけかと思いきや、唐突に火の矢を射掛けてくることもある。

一晩に何度も来ることもあれば、一回も来ないこともある。緊張と騒ぎで満足に眠ることもできず、たまったものではなかった。

乱れつつある士気と統率を改めるために、官軍では堪え切れず居眠りをした兵士を処断し、晒して確たる規律を示した。

しかし、襲いかかる眠気と疲労がそれで消えるわけでは決してあるまい。

徐々に枯渇していく物資と、疲れきつていく兵士達に、官軍の将達はほとほと困り果てていた。

周囲の官軍や諸侯へ援軍を求めようにも、狙ったかのようにその周囲では反乱が勃発する。

足下で騒がれているのに、こちらへ援軍を送ってくれるような余裕は、長い反乱でどこにも無い。

反乱が長引くに連れて、どこも以下に少ない物資で大きな戦果を上げるのかと考えるばかりであった。

かといつて撤退できるかと言えそうではない。

この軍の将達は既に撤退を視野に入れてはいたものの、それが中央で認められるわけがなかった。

兵は疲れきつてはいるものの、軍としての被害は些細なもの。

目立った敗北もなければ、目立った戦果も上げていないのにも関わらず、撤退するな
ど認められるわけがないのだ。

「……そういや、こんな噂を知っているか？」

「何だ」

「……これらの黄巾党を率いている奴は、張三兄弟……三姉妹だったか？ともかくと反
乱の主導者と並んで黄巾党の中では有名らしい」

「どうしてそんなことを知ってるんだ」

「連中がたまに絵を懐に入れていることがあるんだが、ほら、これがそうだ。噂じゃこ
いつが連中の頭役らしい」

「ほお、顔に傷があるがいい女じゃないか」

「ああ、お前の女房なんかより百倍美人だろう？」

「馬鹿、うちの女房よりも千倍は美人だ。こんな女が率いているんじゃない、そりゃ向こう
の士気は下がらないわけだ」

そういつてからからと二人は笑った。

「なるほどな。もしこの噂が本当だったら面白い。えー……名前はい」
暗がりでも文字がよく見えない。

仕方がなく、柵に並び立つ火の光に照らそうとした。その時であった。

真つ赤に燃える炎の向こう。そのはるか遠くから何か黒い点々が押し寄せてくる。

地なりと共に押し寄せてくる波、それをよく見ようと目を凝らした。ついで兵の顔が真つ青に染まる。

黄色い布を頭部に巻き付け、馬に乗って武器を手に持ち押しかける黄巾党の姿がそこにあつた。

「夜襲だアアアアアアアアアツ！」

気がつくのに時間が掛かったのは、二つの原因があつた。

その一つが疲労。

もう一つの理由は声。

これまで夜に襲いかかる際に、五月蠅いほどにまで騒ぎ立ててきた黄巾党。

例え遠くからでも、黄巾党が来るときには激しい声を出しながら押し寄せてくるのですぐに解つた。

しかし今夜の黄巾党は、これまで騒ぎ立てた事が嘘のように、声を潜めて夜襲を行つたのである。

火矢が次々と打ち込まれ、柵が突破されて黄巾党が流れこむ。

これまで来るぞ来るぞと騙してばかりであった黄巾党が、この時ばかりは雪崩のように官軍の陣地に飛び込んだ。

今夜も来れど冷やかしに来るだけだ、戦場で逃げてばかりの連中が攻めてくるはずがない。

心の何処かで小さな勝利の連続によつて驕りが生じ、侮りにどっぷり使っていた官軍の兵士達の行動は遅かった。

各々幕舎から急ぎ飛び出たと見受けられ、鎧すら満足に着ていないものがほとんどだった。

そうした疲れきり、油断した官軍の兵士を黄巾党は次々に刈り取っていく。

「將軍ッ！」

伝令がすぐさま將軍達が体を休ませていた幕舎に向かう。

このままでは全滅すら危ぶまれる有り様だ。

動きが遅れば遅れるほどに、軍としての体裁が保てなくなっていく。

伝令は將軍用の豪華な幕舎の中で飛び込んだ。

「火急の事態ですッ！黄巾党の奴らが陣営に攻めこぎ、大混乱を……ッ!!」

言葉はそこから先に続かなかつた。

飛び込んだ兵士の喉に、一本の短剣が突き刺さっていたのだ。

引き抜こうと手を短剣に延ばすも、触れられること無く体は傾いていき、中へ倒れこんでいく。

「お勤めご苦労様」

彼が倒れる中で耳にしたのは、ここにはいないはずの女の声であった。

倒れ、蹲る伝令。喉が血と刃により塞がれ、呼吸ができない。ただ息が漏れるばかりである。

苦しげに唸る兵の首に足が添えられると、深く踏み込まれ骨が潰れる音が幕舎に響いた。

結巍は足を上げ、目を細めた。

そして自らが投擲した短剣を首から抜き取り、伝令の服で血をふき取って腰の鞘に収めた。

その背後では目を見開いて倒れる官軍の将の姿、そして護衛として幕舎に控えていた兵の無残な亡骸があった。

「おい、ここだツ……ここが官軍の……って結巍様、もうお済みになられたのですか」

遅れて飛び込んできた黄巾党の面々を見ること無く、結巍は「他も済んでいる。戦況は？」と問うて自らが殺した官軍の将達に歩み寄る。

「結巍様の作戦のおかげでさあ。齒ごたえも無くまるで案山子を切るかのようにして、ここまで来れた」

「既にここは落ちたも同然です。後は生き残ってるやつを蟻を潰すように……結巍様、何をなされているんですか」

将兵の服を漁って金銭が詰まった布袋を抜き取っていき、さらに腰や手から剥ぎ取った細工で彩られた剣を品定めしていた結巍。

そんな彼女へ疑問を口にした黄巾の兵達に、結巍は「ん」と唸って口を開いた。

「死体はすぐに硬くなるからな。そうなつてからでは剣を回収することは難しい」

「いや、それは解ってるんですけど……」

「いくら馬鹿のように疲れきった兵達とはいえ、ここまで一人で忍び込み、暗殺するのは苦労したのだ。少しぐらい褒美があつてもいい。どうせ黄巾党から金銭の支給なんざされないのだからな」

「剣はいらん。ここまで私以外に一番先にこれた者への先行報酬だ。とつておけ」と、結巍は黄巾の兵達に武具を放った。

呆気にとられる黄巾の兵達をよそに、結巍は「私は拠点へ帰る。殲滅した後は、好きにやれ。ただ軍の物資にだけは手を出すな」と釘を刺すと、さつさと幕舎から出て行ってしまった。

残された黄巾の兵達はしばらく呆然としていたが、ふと気がついたように結巍から投げ渡された剣に各々視線を落とした。

流石に将の階級が持つものなだけあって、素晴らしく出来が良い。

細工が施された鞘から除く刀身は、彼らの持つ物とは比べ物にならぬほど、それは眩く輝くいていた。

「なあ。俺さ、元々農民で学がねえし、野盗になつて人殺して物を奪うぐらいには強欲で、容赦なんざこれっぽっちも持つてねえつもりだがな」

ごくろり、と唾を飲み込む。

幕舎の中で息絶えている将兵達。歴戦の勇士が、どうやったらこんな無念そうに、苦しげに死んでいくのか。

そして人をこれまで殺してきた自分でさえ、躊躇いを見せるほどの死体から、躊躇なく金銭を奪い取っていった。

これだけの大勝利にも関わらず、僅かな感情を見せること無く当然とばかりに去っていった結巍を思い出し、体を恐れに震わせた。

「あの方にだけは、結巍様にだけは逆らつたらいけない。俺以上に強欲で、容赦がない結巍様にだけは、絶対に逆らつちやなんねえ」

その言葉に全員が静かに頷くと、受け渡された武具を手にそれぞれが走り出す。

もし、そんな結魏の言いつけを破って物資に手を伸ばす輩がいれば、今ここで念を押された自分たちまで殺されかねない。

幾度と無く官軍を打ち破り、その狡猾さで絡めとってきた結魏の姿を、彼らは常に見せられていた。

元農民であり、元賊であつた彼らにとつて官軍は絶対的な武の象徴であつた。

だがそんな官軍が結魏によつて手玉に取られていく姿を見てからは、彼らの中で絶対的な象徴は結魏に変わる。

絶対的な信を置くからこそ、彼らは結魏の恐ろしさを一番に感じていたのだ。



よくよく考えれば、今の私の立場は「フリーター」である。

黄巾党はどんなに活躍したところで、昇進しないし給料も上がらない。

というか給料の存在すらない。ブラック企業板ですら慄くであろう宗教団体だ。で、そんな黄巾党に所属する者達はどうかやって金を稼ぎ、食つていくのか。早い話が強奪である。他人の不幸で飯が旨いを地でやっていく生活スタイルだ。

現代のニートでさえ家族親戚にしか迷惑かけていないのに、私達に至っては国全体に迷惑をかけている。

最初はそんな現実には打ちのめされていたが、次第に生活するうちになれいった。ぶつちやけ、日本人っていうのは、周りの空気に当てられやすいのだ。

周りがDQNだらけであれば、自分もDQNになるか、その周囲の空気にやられて陰気になっていく。

周りが勉強ばりばりできるのであれば、自分も頑張るか、ついていけないといって割り々と普通に勉強できるのに落ちこぼれみたいに感じてしまう。

ぶつちやけ公務員だって安定なんかまったくしていない。

教員の退職金は四百万減らされたし、給料だって激務にもかかわらず減らされ続けている。

そのうちクビにされるようになって、全くおかしくはない。

しかし何故、人は公務員という言葉に安心というレッテルを貼るのか。

それは周りが張っているからである。外国人が、「あいつら周囲に同調しすぎていて自分が無い」と言うくらいに日本人は周囲の意見に振り回される。

でもそんな事はみんな解ついても、私のような凡人凡夫はその道を進むのだ。

だってみんなやってるし、安心するからだ。私も仮初だろうが安心したい。

というわけで、私も黄巾党で目に見える安心をとって死体から金銭を回収している。解決も何もしていないのに、問題を押し入れにぶち込んで今に生きる。

そもそも問題を見ていたらトイレ事情から始まって、現代社会で生きていた自分にはなんかもうキリがない。

ほら、モンハンでモンスターを倒したら「ああ、こいつ強かったありがとう」とか「冥福を祈ります」と思う殊勝なハンターさんもいるが、大半は違うはずだ。

恐らくそんなこと考えずに「ヒヤッハー素材だあ」と、ナイフ片手に剥ぎ取りを始めるとは違くない。誰だってそう、私だって剥ぎ取りしたいのだ。

それにこんな重い物持っていたら、彼らも可愛そうだ。

死後に物に執着していたら、ろくなところに行かないって立川の聖人も言っておられる。

私は死後、彼らが憂いがないよう、気持よくあの世に行ってもらおうお手伝いをしているのだ。

ちなみに送迎から後処理までゼロ円で行うのだから、現代の葬式仏教も真っ青のクリーンっぷり。

いわば慈善活動である。

宗教団体に普通にやっけてもらいたいことナンバーワンを、私達はこの福祉の「ふ」

の字もない後漢末期で実行しているのだ。

なんと素晴らしいことだろう。

あ、剣はいらないや。

もし知ってる人が見たら「あ、こいつ仇だ」と思われて殺されかねない。

関羽の武器持つて調子乗っていたら、恨まれて息子に殺された呉の潘璋という事例がある。

「ほら、みんなよくがんばったね。この剣ご褒美だから上げるよ！何か銘も彫ってるしきつと有名なんだろうろうねッ！」と金銀の類だけはもらって、武器は適当に報酬にしてみる。

みんな喜んで受け取っていった。私も押し付けられてよかった。お互い幸せのハッピーエンドである。

その後は一切知らないし興味もない。アフターサービスは受け付けておりません。返品も不可。

そういえば、この前入ったばかりの新兵が、人を殺すのが苦手だと相談してきた。殴った。

おい、こら。肉壁になって私の盾になれやとオブラートに包んで説得。

「天の時は地の利に如かずッ！地の利は人の和に如かずッ！我らは国は無く、兵馬も

少ないが、これらは全くもって不必要だツ！道を得る者は天下の人すべてがこれに従い、道を得るものは天下の人すべてに背かれる！漢は道を得た蒼天にすがり、我らは道を得て黄天を仰いでいるツ！天下の民である我々にさえ見捨てられた漢が、どうして我々に勝てるだろうかッ！」

啞然とする新兵に手を差し伸べて立たせると、私は彼を力いっぱい抱きしめる。うえ、汗臭い。水浴びぐらいしろつての。

「確かに心ある君のような者は武力に訴えることに忌避感を覚えるだろう。しかし我々は、戦うしかない。万を止む得ずとも、いったん戦えば人心の親和協力を得て必ず価値を制する。君は正しい、だからこそ私は正しい君の協力が欲しいのだ。戦ってくれなな？」

もう理由にすらなっていない。そもそも民の皆さんにもご迷惑を十二分におかけしている。

涙を見せる名演技でごまかした。女の涙は、それだけで意味がある。

新兵は泣きながら「はいッ！」と力強く答え、周囲はそんな私達を見て何故か士気が上がった。

こうして私は肉へ……素晴らしい兵士達の心をつかむことに成功する。

……言ったらイエスマンにしかならない馬鹿どもばかりも問題である。

こいつらは頼りにならないから、私がしつかりしなければならぬ。じゃないと死ぬ。

ちなみに私は人を殺すことに忌避感はない。あつたら生き残れん。戦つて生き残る事の葛藤なんてものはない。

というか葛藤している余裕なんて凡人凡夫にあるわけがないのだ。

毎日戦いの中を生き残ることで必死である。生き残れるだろうかという不安でいっぱいである。

私には武を競つたり、有名なやつを倒して喜べる余裕も無いのだ。

「人を殺してしまった」と後悔したり、「人を殺していいのか」と悩んでいる連中は随分とまあ精神に余裕がある連中だ。

絶対に精神的超人である。何でお前ら明日の命すら見えないのに、そんな事考えられるんだと感心する。

漫画とか小説とかで異世界に呼ばれるだけあつて、実に優しく他を思いやれる持ち主だ。

その考えを大事にして生きていってほしいと思う。私はそんな考え大事にしていったら生きていけないので、とつくの昔に捨ててきた。

私の中の作戦は「常に命を大事に」、陣形は「複縦陣」だ。

私が生き残れば、例え何千人死のうがその戦いは勝利である。他人の死に責任を持たない。持ったら罪悪感で死んでしまうのが、凡人のメンタルクオリティだ。

そんな私が軍の責任者になっている。

笑えない冗談だと思つたが、本当だった。ポンポンが痛い。

途中で逃げようとも考えたが、護衛とかいつて離れない奴まで現れ始めた。

「結魏様は黄巾党全体に欠かせないお方です。何かあつたらどうするのですか」

お前ら、別に私が原作でいなくても「ひゃつはー」やってたではないか。

よくまあそんな大嘘を本人の前で言えるものだ。

罵倒の言葉はいくらでも飛び出してくるが、いくら罵倒したところでしょうがない。

こいつらは本当に未来に生きているので、本当に黄巾党が勝てる未来を信じているのだ。

ついでに何故か私の事まで信じている。今、彼らを捨てることは簡単だが、そうなればどうなるだろうか。

……裏切り者を末路なんざ、悲惨なものである。

間違ひなく私はエロ同人展開に巻き込まれるだろう。そういえば恋姫つてエロゲだった。

では説得するのはどうだろうか。

その一、黄巾党は敗北すると告げる。もう戦うことをやめよう。

なるほどオーソドックスだ。ところで第二次世界大戦末期、日本は敗北すると日本人がいったら、その日本人はどうなったか知っているだろうか。

頭空つば信仰馬鹿を舐めたらいけない。恐らくその日のうちに私はエロ同人でも、一部の人間にしか受けないようなひどい目に合わされるに違いない。

その二、張三姉妹なんて女共についていったら破滅する。

目の前で勧誘している新興宗教家にこれいったらどうなるのか、実に想像に容易いだろう。

恐らく私は最終的に「んほお」とか言わされる展開に持ち込まれるに違いない。

その三、漢に味方しよう、今ならまだ取り戻せる。または、抜けだそうじゃないかと説得する。

家族が重税で餓死したり、税が払えなくて家族が処刑されたり、泣く泣く娘を売り飛ばした農民出身者達に本当に言えると思っているのか。

言ったら確実に私はホワイトソースまみれにされるだろう。

これらは全部、私の武の腕が恋姫武将並に高かったら防げることだが、残念ながらそんな現実はない。

頭のなかではいつだって無双できる。だが現実では、いつだって意見求められたら無

言で黙りこむぐらいに一般ピーポーで情けない私である。

同じく、私の武で官軍を相手にするなんざ不可能だ。

あいつら筋肉モリモリのマツチョマンの変態なんだ。匂いだって臭い。

力もなく、フアブリーズもない私が勝てるわけがない。エロ同人展開どころか、打首になつて終わりである。

うちの馬鹿どもに陣形なんて高尚なもんを形成できるわけがない。

私も陣形は知っているが、そもそも作つてもどう動かしたらいいのかまったく解らない。

車懸りの陣とか、あれ陣形は知ってるけれど、どうやって入れ替わっているんだよ。

そんなんでできるんだったら、曹操や孫策のところに行っている。

かと言って直線番長で勝てるわけもない。

向こうはマジモンの戦争屋だ。数で押ししていた波才や張曼成だつて、結局やられてしまった。

私の軍、というか黄巾党は攻めるのならまだしも、危機に対応する能力はない。一旦崩れれば、瞬間に敗北する。

オタクと同じようなものだ。攻めるときは強いが、一旦負けるともう感情論丸出しでぐだぐだになる。

私自身もそうだったからよく解る。その時は何故か勝つたと満足するけれど、よくよく考えていたら負けていたと気がついて落ち込むまでがテンプレだ。

というわけで、まともに私が戦うことは一度だつてなかった。

補給を潰し、数を生かして数百名一斑の班を形成。

毎夜順番制でこの分けた班が、官軍の陣へDQNのお騒ぎ迷惑行為を繰り返す。

黄巾党は数だけが多い。例えば出てこられて一斑や二班、十班無くなつたつて少しも揺るぎはしない。そのうち騒ぐだけだと知つて出陣しなくなつたらこつちのものだ。

もし相手が退こうとしたら、その時は数千単位でちよつかいかけて逃げる。まともに当たらない、負ける。

疲れきつたり、調子に乗つて冷静さを無くして深くまで侵攻してきたら、周囲と連携して……というか周囲に任せて取り囲んで制圧。

死ぬ思いはしたくないから周りに頑張ってもらう。

仕事と同じで活躍の場を用意してあげれば、後は勝手に働いてくれるし戦つてくれるのだ。功績欲しさに。

どうして人は「周囲の敵から優先的に狙われる」と「このアイテムは一度入手したら死ぬまで手放せません」という「功績」という名の呪物を欲しがるのであるか。

命を大切にしたい凡人凡夫の私の考えでは、遠く及ばない世界を彼らは生きているの

だろう。

……最終的には、周りばかりに戦わせた結果。周囲の味方が疲弊してしまつて、頼る相手がなくなつた。

おかげで私の軍を除いたこちら一帯の黄巾党が、劣勢に追い込まれまくっている。

何回もお願いだから助けて欲しいという旨が書かれたお手紙を頂いた。

全部途中まで読んで燃やした。

悪いが、私は自分の命を守るので精一杯である。

散々力ない民を虐めたのだから、今度は自分が虐められるようになっただけではないか。因果応報、諦めて欲しい。

この手紙はここには来なかつたそれでいいじゃないかと、隣にいた黄巾兵士に笑いかけると、何故か全力で首を縦に振っていた。栄養不足だろうか。

結果的に全体から見れば黄巾党滅亡のカウントダウンを早めた気がするが、私は元気だからそれでいい。

無論、みんな救いたいという建前は大切だが、そのために死んだら元もこもない。

平々凡々な私は、みんなを救えたり導いたりできるほどスペックが無いことなんか一番解っている。

ごめんね張三姉妹、これも全部漢の圧政がわるいんだ。きつとそうだ。

最終的にとんでもないと噂の官軍が来てしまったが、その時には既に周囲で頼れる味方はみんな目が死んでいた。足りない連中である。

仕方なく私が一人で陣地に踏み込んで、暗殺するという暴挙に出た。

念入りに三ヶ月ぐらい寝せないように嫌がらせを続けたかいあって、周泰のように高いスニーキング能力が無い私でもうまく潜入が成功。

獣狩の経験が長い山育ちを、舐めてもらっては困る。

予想通り、兵も、将も疲れきっていた。

だが油断はしない。私のような才能がないやつが調子に乗ったって、ろくなことがないのだ。

毒を水や食事に毒を盛り、寝込みを襲う。起きているものもいたが、隠れて隙を見せたところを毒で暗殺。

刃物による殺傷では、叫ばれる恐れがある。しかし神経系の毒をたっぷり塗った刃は声すらも発せさせない。

いやあ、成功して本当に良かったよかった……。

いや、良くなかった。

何故かこれまで周囲の連中に押し付けられたはずの功績が、全部私のものになっていた。全部私が築き上げた功績になっていた。

通りであんな練度がクソ高い官軍がこつちに来たわけだ。

何でや、何で呪いのアイテムが揃いも揃ってこつちに来たんや。

そうしてしばらくして、黄巾党の中央に呼ばれることになった。

何でもご褒美をもらえるのだという。

黄巾党就職して初めてのお給料である。

管理職や現場士気、毎日残業していたのに関わらず支給額はゼロ。

そんな黄巾党初めてのお給料である。さすがの私も高揚します。

もう数ヶ月も働いているのだから、きつとかかなりの額をいただけるに違いない。

北郷さんに絡みまくることで有名な、身長バラバラ三馬鹿に連れられて張三姉妹の前に出る。

臣下の礼っぽくびしつと決めながらも、私の頭の中は初任給でいっぱいだ。ワクワクしながら、御三方の言葉を待つ。

「貴方のおかげで凄く助かってるわ。ありがとう」

「ま、がんばってるんじゃない？このままこれからも頑張つてよね」

「えーとねえ、えーと、お疲れ様？」

うん、君たちの御礼なんてどうでもいいんです。お金、お金をください。

誇りで飯なんて食っていけないのだから、老後の安心のためにもお金をですな。

「御礼に、私達の舞台の最前席に招待してあげる」

「最後に配る人形とかもあるんだけど、内緒で一つ確約してあげるねッ！」

「えへへえ、いっぱい楽しんでいってけると嬉しいな♪」

……はい？

え、『ぶたいのさいぜんせき』？え、お金……え？

「流石にそれだけではありません。そしてあなたの多大な功勲を認め、私の真名の一部を取った『人公將軍』の地位を授けます。これは私達の信頼の証です」

「ちよ、だつたら私の『地公將軍』の方がいいに決まってるじゃないっ！」

「え〜おねえちゃんは、『天公將軍』の方が可愛いと思うなあ」

……ち、地位？

いや、そんな目立ちまくり狙われまくりの貴方達のポップ広告はいいからお金を……。

「ちいの方が絶対がいいわよッ！」

「ちい姉さんのイメージは、結魏將軍には合わないわ」

「絶対お姉ちゃんの名前のほうが結魏さんにはあつてると思うなっ！」

啞然と固まる私をよそに三姉妹の議論が白熱した結果。

私は『天公將軍』と『地公將軍』と、『人公將軍』の三つを授けられることが、張三姉妹の独断によって決定された。

全て合わせて『三公將軍』というらしい。

神様何故です、どうして私のような状況に流されるしか無いような一般人にこんな試験を与えるのですか。

と、祈るもこの世界の神（外史の管理者）は筋肉モリモリマッチョマンの変態ゲイ二人と、最終鬼畜眼鏡ゲイと受けヘタレゲイしかいなかった。

この世界の神は全部ゲイだった。こんな世界滅んでしまえ。